

平成 25 年度 第 1 回 PF-UA 拡大運営委員会

PF-UA 拡大運営委員会

日時：2013 年 6 月 5 日(水) 15:00～17:00

場所：KEK 4 号館 2 階輪講室 1, 2

出席者：

佐藤 衛、朝倉清高、清水敏之、田中信忠、岡林 潤、植草秀裕 腰原伸也、沼子千弥、木村正雄、近藤 寛、今井基晴、奥田浩司、尾嶋正治、鈴木昭夫、高橋敏男、高橋嘉夫、田淵雅夫、林 好一、藤森 淳、船守展正、三木邦夫、百生 敦、横谷明德、足立伸一、熊井玲児、河田 洋、千田俊哉、村上洋一、平井光博、高橋博樹、中尾裕則、吉信 淳、小田切丈、岸本俊二、和田 健、松下昌之助、手塚泰久、枝元一之、山口博隆、杉山和正、月原勝宏、山田所長、兵藤一行、組頭広志

1. 佐藤会長から挨拶があった。

2. 物構研 山田所長より挨拶があった。

2013/5/23 J-PARC ハドロン実験施設で放射性同位体の漏洩と内部被曝の事故があり、つくば地区の加速器を有する研究機関でも大規模に調査を行っている。JAEA と KEK が協力して、問題解明と今後の対処についての検討を進めている。

このように、これまで考えてもいなかった事件が生じた場合にどうするかも重要な検討事項で、放射光実験施設にも影響が大きいだろう。

3. 会計幹事から H25 年度の予算案について説明があった。

4. 戦略将来計画小委員会 腰原幹事より報告があった。

BL-4A の担当教員の退官に伴うビームライン運営の見直しについて、今後他のビームラインでも起こりうる事態のプロトタイプとして慎重に検討してきた。これまで、PF-UA から、当該のマイクロビーム UG(高橋嘉夫代表)に、UG 運営グループのラインとして運用が可能かどうかを検討依頼してきた。BL-4A では 2 結晶モノクロメータと多層膜モノクロメータが運用されてきたが、PF のスタッフと UG の共同体制で今後 BL-4A を運営するにあたっては、2 結晶モノクロメータのみ維持する方向で計画を進める。高橋代表からは、

この問題に関しては、一部のユーザーにとっては、それまで何も情報がないまま、突然多層膜モノクロメータが使えない、という状況になることに対する懸念のコメントがあり、マシンタイム配分・ビームタイム申請に関わることなので、BL-4A のスペックに関する早急な告知とすでに課題が採択されたユーザーに対する対応を行うことが必要であることを確認した。

高圧 UG も同じような状況にあり、高圧 UG についても、やはり 3 年くらいから PF-UA と PF との間で議論を始めるべきとの見解も確認した。

5. 近藤教育担当幹事より、院生奨励課題（E 型課題）について説明があった。院生奨励課題（E 型課題）については 7 月の PAC で提案し、次の PAC で承認されれば、来年の 4 月から運用が開始される。この課題は、大学院生の優れた研究を推進する課題であり、a) 大学院生（博士後期課程在学者もしくは博士後期課程進学予定の修士 2 年生）が申請を行い、b) 所属大学の指導教員が保証人としてメンバーに加わる、c) PF 受入担当教員と事前に相談するなどの条件が課せられる。

これに類似した学生の研究支援システムとして、すでに特別共同利用研究員という、PF スタッフと大学のスタッフが共同の指導者になって院生の研究指導を行う制度があり、これに対して院生奨励課題をどのように位置づけるかを、教育小委員会で検討している。

特別共同利用研究員制度では、運用に関して大学と KEK の間で協定を結ぶようにしているが、E 課題では、大学側の指導教員が最終的な責任者とする。課題審査は、学生が主体となって研究を計画・推進することを前提に、PAC の審査基準で行う。このとき、受け入れ担当の指導教官と事前に打ち合わせで、研究課題を検討することとする。E 課題での旅費のサポートは G 課題よりも厚くする方向で検討している。また E 課題の義務として、PF シンポジウムで成果発表を行い、PAC の審査を受けることとする。

6. PF の将来計画について、村上施設長より説明があった。

Photon Factory は、年間 3200 人のユーザーを有する 31 歳の施設である。これまで、フォトンファクトリー次期光源検討委員会により、PF 次期光源として ERL が採択され、KEK ロードマップにもその記載があるが、日本放射光学会より、東日本に第三世代リング建設計画があがってきており、KEK がこの計画に積極的に関与していく可能性の検討を行う依頼があった。ERL までの 10 年を埋めるための近将来計画を KEK の中で議論することがのぞまれて

いる。

ARは直線入射路を確保することでエミッタンスを下げようとしている。

一方、PFは30年を経た施設として、次の3GeVリングの計画を協力を推進することが、次の世代へのスムーズな移行につながると考えている。

参加者からのコメント：

- 東北の3GeVリング、今回の3GeVリング、SPring-8IIの3つの計画があるなかで、日本の放射光実験施設の運営体制をAll Japanでどのように構築していくか、放射光学会で検討をお願いしたい。
- PFとARのアクティビティは、現在から3GeV、そしてERLへシームレスに移行することが最も重要である。
- 3GeVリングのスペックについて、実際のユーザーであるPF-UAからどんどん要望を発信して行くことが重要である。KEKが先導する、PF-UAも支援するという体勢が重要であり、PF懇談会からPF-UAになった大きな力をここで発揮できるのではないか。PF-UAからは、3GeVの先導的な役割を果たしていただきたいこと、またユーザーとしての要望について、KEK機構長と放射光学会に要望書を提出する。どのようなサイエンスを展開できるか議論を始める。これから育ち行くユーザーのことが、放射光学会にとって非常に重要である。
- PFの大きな特徴として、教育・産学協同連携、650もの論文、旅費も支給という存在を無くしてはならない。